

試験研究成果普及情報

部門	養豚	対象	普及
課題名：初産分娩後の発情再帰日数からみた母豚の体重減少率と繁殖成績			
<p>[要約] 母豚の分娩後の体重減少率は、大きいほど発情再帰日数も延びる傾向にある。離乳後 7 日以内に発情がくるためには、体重減少率を 13%未満に抑えることが必要である。なお、哺乳開始頭数が 10 頭以上、もしくは生後 2 週齢の子豚の一腹総体重が 40kg 以上の場合は、体重減少率が 13%以上になる確率が高い。</p>			
フリーワード 豚 発情再帰日数 体重減少率			
実施機関名	主 査	千葉県畜産総合研究センター 生産技術部	養豚養鶏研究室
協力機関			
実施期間	2000 年度～2005 年度		

[目的及び背景]

離乳後の発情再帰を順調にこさせることは、生産性を向上させるための重要な技術である。通常、離乳後 4 から 5 日で発情徴候が現れ、7 日以内に交配が完了する。しかし、哺乳期間中の栄養状態、環境要因等により、発情徴候がなかなか現れない場合がある。特に若い産次の豚は泌乳に要するエネルギーだけでなく母豚自体の発育に必要なエネルギーもあり、栄養不足に陥りやすく、発情がなかなか来ないため淘汰されやすいとの報告もある。

昨年完成した系統豚「ボウソウ L3」は産子数の改良を重点に行い、産子の発育も優れている特徴をもっている。このように初産における産子数の多い母豚について、発情を順調に再帰させるためには、どの様な点に注意することが大切なのか、今回産子数、哺乳中の産子の発育及び母豚の体重の変化から検討した。

[成果内容]

1. 母豚の体重減少率（(分娩 1 週間前体重 - 離乳時の体重) / 分娩 1 週間前体重 × 100）と離乳頭数および離乳時一腹総体重との間には正の相関（ $p < 0.01$ ）が認められた。（図 1，図 2）
2. 母豚の体重減少率と発情再帰日数との間には正の相関（ $p < 0.05$ ）が認められた。（図 3）
3. 一腹総体重は、発情再帰日数が 7 日以内の群より 8 日以上群が生後 1 週齢以降いずれの週でも優れた発育を示した。その時の哺乳開始頭数及び離乳頭数は、発情再帰日数が 7 日以内の群より 8 日以上群のほうが多かった。（図 4、図 5）

以上の結果から、母豚の体重減少率を 13%未満にすることより、発情再帰日数が 7 日以内にくる可能性が高いことが示唆された。また、哺乳開始頭数が 10 頭以上、もしくは生後 2 週齢の子豚の一腹総体重が 40kg 以上の場合は、4 週齢の子豚の一腹総体重が 74kg 以上になり、母豚の体重減少率が 13%以上となる確率が高いため、体重減少率を極力抑える飼養管理が必要であることが示唆された。

[留意事項] なし

[普及対象地域] 県下全域

[行政上の措置] なし

[普及状況] なし

[成果の概要]

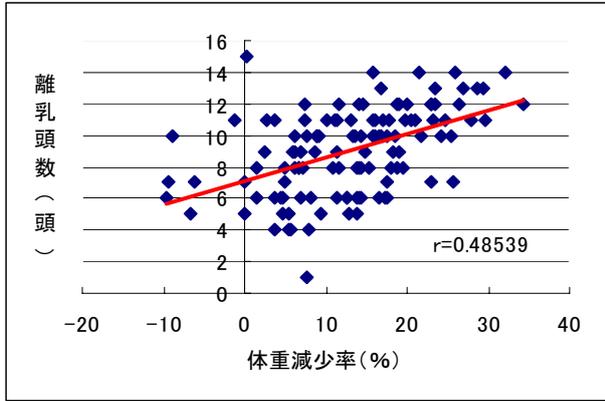


図1 体重減少率と離乳頭数の散布図

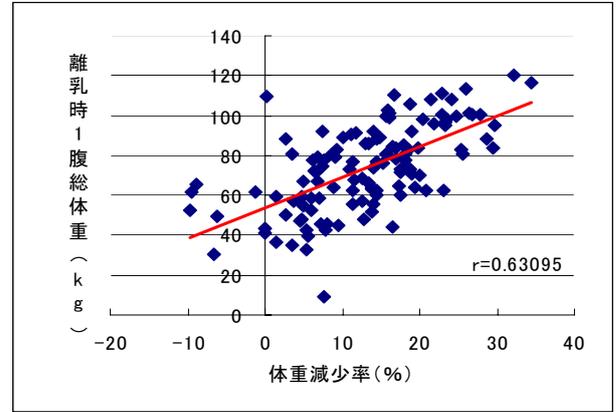


図2 体重減少率と離乳時一腹総体重の散布図

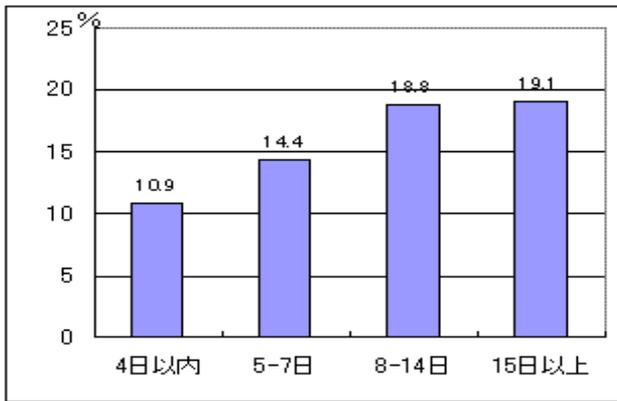


図3 発情再帰日数別の体重減少率

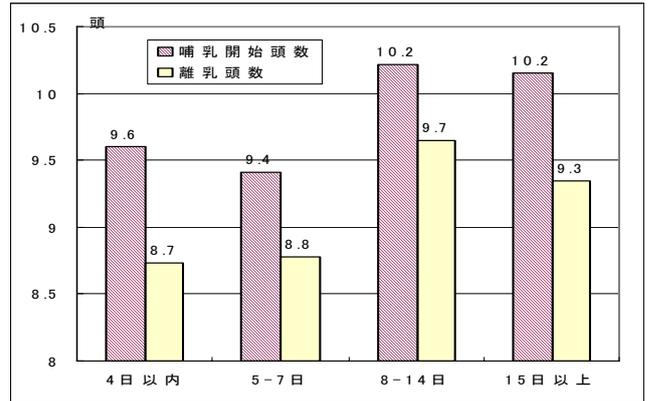


図4 発情再帰日数別の哺乳開始頭数と離乳頭数

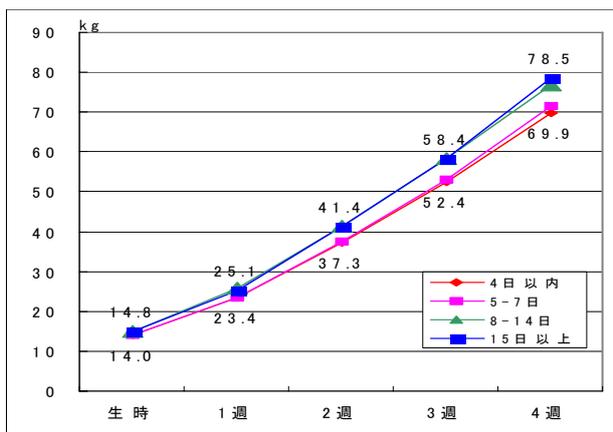


図5 発情再帰日数別の生時から離乳までの一腹総体重

[発表及び関連文献] 平成17年度試験研究成果発表会資料 (養豚部門)

[その他]